

---

---

# □ オーケストラ

## 寺西基之

---

日本のオーケストラの財政事情は、一部を除いて相変わらず苦しい状況にあり、ますます厳しさを増している楽団も少なくない。安倍内閣が打ち出した経済政策アベノミクスについては様々な見方があるが、少なくともクラシック音楽界、とりわけオーケストラ界にはよい成果がほとんどもたらされていない。企業からの協賛金や寄付金の減少、以前にも本欄で取り上げた大阪フィルハーモニー交響楽団や日本センチュリー交響楽団（当時は大阪センチュリー交響楽団）の例のような行政からの補助打ち切りなど、これまでのオーケストラの経済基盤が揺らぐ中、楽団の経営や運営の仕方について発想の転換も必要とされてきているようだ。

その意味で注目したいのは、神奈川フィルハーモニー管弦楽団が公益財団法人になるために3億円もの債務超過を寄付金で解消したことだ。公益財団化をめざしていた日本のプロ・オーケの中で唯一取り残されていた神奈川フィルにとって、公益財団へ移行できなかったら解散の危機もあるという状況の中で、神奈川唯一のプロ・オーケストラをなくしてはならないという思いのもとに県知事や横浜市長、企業経営者らが応援団を結成、官民一体の寄付金制度を立ち上げて、広く個人からも寄付を募り、不可能と思われていた債務超過を帳消しにして、2014年4月に公益財団法人移行を実現させた。アメリカのように富豪や大企業による寄付金の制度が根付いていない日本で、多くの寄付が集まってひとつの楽団の存続を可能にした意義は大きい。

といっても今回は楽団存続の危機といった状況があって集まった寄付であり、今後の活動にも継続的な寄付や援助が必要である。そのためには、楽団が社会的に必要な存在であることを一般に理解してもらえ活動を展開していくことが何より大切で、これは全国すべての楽団にとっていえることである。民間からの寄付にせよ、自治体やスポンサーの支援にせよ、オーケストラ活動への理解がなければ成り立たない。公的な補助が大きな土台となっている団体は、上述の大阪の2楽団のように（あまりに文化に対する認識のない首長側に問題があったにせよ）、首長や議会の理解が得られなければ減額や打ち切りということになって、経済基盤が崩れてしまう。寄付や補助頼みでなく、民間の経営のノウハウをいかに取り入れて健全な運営を進めていくかが求められるとともに、オーケストラが社会の中での存在意義が広く認められるためには楽員の姿勢も今まで以上に問われている。神奈川フィルの場合は今回の危機に際して楽団員にも大きな変化が見られ、演奏のモチベーションの向上だけでなく、社会貢献の意識も高まったという。そうした楽員の意識改革もあったからこそ民間企業や個人の多額の寄付が得られたのだろう。

オーケストラの運営は公益財団法人制度とそぐわない点が多く、その中でいかに経営を舵取りしていくかが今日とりわけ大きな課題になっている。その点で楽天の三木谷浩史を理事長に据える東京フィルハーモニー交響楽団の積極的な戦略は注目すべきものがある。しかし一方で幾つかの楽団では、オーケストラの文化的特性への理解のない専務理事らが市場原理だけで経

営改革を進めた結果、事務局内部や楽員の間の軋轢が生じて混乱した。マネジメントセンスは重要だが、芸術としての音楽を追求し聴衆に提供するという本来の目的を忘れてしまっただけは元も子もない。そのあたりのバランスをどうとっていくかが今特に問われているといえるだろう。

活動内容の点では、どの楽団もそれぞれに独自性を打ち出しているが、2014年度にはプログラムや客演指揮者・ソリストの点で、以前に比べるとやや守りの姿勢が窺える楽団が多くなったのも、財政事情を反映するものだろう。それでも趣向を凝らした企画や果敢な選曲は多く、札幌交響楽団の伊福部昭100年記念（高関健指揮）や早坂文雄100年記念（下野竜也）、東京都交響楽団のマルティヌーのcantata「花束」（フルシヤ）、新日本フィルハーモニー交響楽団のベートーヴェン+ツインマン作品のシリーズ（メッツマッハー）、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団のヴァイルの交響曲（阪哲郎）、読売日本交響楽団のカレル・フサ「この地球を神と崇める」日本初演（下野竜也）、NHK交響楽団のドビュッシー「ペレアスとメリザンド」全曲（デュトワ）、セントラル愛知交響楽団の丹波明の未発表のオペラ「白峯」世界初演（井崎正浩）、関西フィルハーモニー交響楽団のワグナー「ジークフリート」第3幕（飯守泰次郎）、大阪交響楽団のフランツ・シュミットの交響曲第1番（寺岡清高）等々、枚挙に暇がないほど意義深い演奏会が多かった。ヴェロと仙台フィルハーモニー管弦楽団、飯森範親と山形交響楽団、井上道義（昨年は一時期病気で活動を休止したが）とオーケストラ・アンサンブル金沢、広上淳一と京都市交響楽団、秋山和慶と広島交響楽団などは指揮者と楽団とが長期にわたって積み上げてきた成果が演奏に現われているし、日本フィルハーモニー交響楽団はラザレフのロシア物とインキネンのシベリウス&マーラーを軸に充実した活動を展開している。また各々シェフ就任2年目となる大友直人と群馬交響楽団、ブラビンスと名古屋フィルハーモニー交響楽団、小泉和裕と九州交響楽団も、それぞれの路線が軌道に乗ってきたようだ。

2014年に新しいシェフの就任で新体制がスタートしたのは、東京交響楽団（ノット）、神奈川フィル（川瀬賢太郎）、セントラル愛知（スワロフスキー）、大阪フィル（井上道義）、日本センチュリー響（飯森範親）などである。東響は前任者スターンが高い成果を出しただけにノットがいかに独逸色を打ち出していかかが注目点となり、神奈川フィルやセンチュリー響は経営的に試練の時期だけに各々これまでとはやや異なる新しい方向を打ち出そうとしているようだ。大阪フィルは井上道義が4月に就任披露定期の直後に病氣療養となるといふ思わぬ事態に見舞われたが、秋には完全復帰を果たした。いずれにせよこれらの楽団の新シェフがどんな結果を出してくれるかはしばらく見守ってからの評価となろう。

外来オケの来日も、例年よりやや地味な感はあったものの、相変わらず多かった。ウィーン・フィルやゲヴァントハウス管弦楽団などのメジャー・オケは勿論のことだが、スイス・ロマン管弦楽団（山田和樹）、ローマ・サンタ・チェチーリア管弦楽団（バツパーノ）、ドイツ・カンマーフィル（P・ヤルヴィ）といった一流ながら超メジャーでない楽団が優れた演奏を聴かせたのが収穫だった。この3つの楽団の楽員各自の自発性は並々ならぬものがあり、身体全体で音楽を表しつつアンサンブルを作り上げることで聴衆を惹きつけようとするその姿勢は、聴衆との結び付きを模索している今の日本の楽団にとって、見習うべきものがあるように思われる。